

---

# 魔王な少女

悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王な少女

### 【Nコード】

N7940K

### 【作者名】

悠

### 【あらすじ】

つまらない日々を過ごしていた櫻井鳴の学校にある日小学校のときの幼なじみ至道真生が転校してくる。再開を喜ぶ鳴だが彼女は小学生のときとは180度変わっていて……

日常（前書き）

ヒロインまだでてませんすいません

## 日常

窓から見た外の景色は鮮やかなピンク色に染まっている。  
綺麗、そう思えるだけの心の余裕はなかった。

「はあ」

軽く溜め息を一つ。

また一年なにも起こらなかった。

いまは新しい学年になり去年に引き続いて担任を受け持つ教師のもう聞き飽きた、校則の厳守、今年は受験の年だということ、等々を聞かされるHRの時間だった。

俺、櫻井鳴は高校三年の春、そんなことを思った。

この俺が通う天乱高校は、県内でも有数のトップ校で、頭のいい学校へいけば面白い高校生活が送れる、と親、教師にいわれ続けすっかり洗脳されてしまった俺は、それはもう死に物狂いで勉強した。無事合格し、素晴らしいハッピースイートスクールライフを想像していたのだが、この学校は俺の期待には応えてくれず、そのままずるずると二年間怠惰な日々を送ってしまった。

そして高校三年高校生活最後の年、今年こそはと淡い期待をもってはいるのだが、同時に面白いことなんて起こるわけがない、という自分が半分以上を占めている。

俺はまたため息をひとつ。

「はあ」

そうして度々ため息をついてるうちにいつの間にかHRは終了しており休憩時間となっていた

「新学期初日から暗いね」

と、わざわざ俺の机の前まで来て余計なことを言ってきたこいつは左闇光、相変わらず光なのか闇なのかはつきりしてほしい名前だと思っ。

「そんなこといったって名前は親がつけたんだから仕方ないじゃない

いか」

ちなみに、こいつ自身はどちらかというところと闇よりな外見で、前髪はかなり長くこちらからはよく眼がみえない程だ。

趣味も読書（ホラー系）というなんかもう完璧ダークな根暗野郎である。

こんな奴にまで暗いといわれるとは、そこまで落ちぶれたのか俺は…

「まあ、暗いというのは否定しないがな」

現に暗かったし。

「なにか理由でもあるの？」

面白いことがおきないから、なんていうのは笑われそうだしな、

「内田の話がつまらなかった」

内田とは担任教師のことだ。

まあ、嘘は言っていない、…ほとんど聞いてなかったけど。

すると、光はフッフフと暗く笑う。軽く怖いよ、それ

「内田先生の話がつまらないのはいつものことですよ」

ぐっ、確かにそうだな、他にいい理由がないものか

言い訳に悩んでいると、俺の名前が呼ばれた。

確か、もう三年ということできなり進路相談があるんだったか。

まあ、なにあとまあいまだけはGJだ内田。

「じゃあ、俺進路相談にいかなくちゃ」

そういつて教室からでる。後ろからフッフフって聞こえたの気のせい

だよな？気のせいだよな！

軽い恐怖心に苛まれながら進路指導室へと向かう。指導室には内田

が少し険しい顔をして待っていた。

内田は顎で椅子を示して俺を座らせると一呼吸置いてから面談を開

始させる。

「お前は希望はあるか？」

「特にありません」「なら将来の夢とかは」

「特にないですね」

内田はふうと息をつくとき、生徒の模範らしく短くまとめた髪をガシ

ガシと掻き、俺に向かって一枚の用紙を滑らせる。

「なんですかこれ」

「進路希望用紙だ希望の大学なり将来の夢なりかけ」

つまり無理やり志望を決めると

「そうじゃない、時間を掛けて本当に目指すものを探せといってるんだ」

意味は同じだろ

「はあ、分かりました」

「よしなら戻っていいぞ」

とりあえず一礼して踵をかえし、退出する。

「希望、ねえ」

行きたい大学なんてないし夢もない。

……ぱいろつとって書いとくか。

とりあえず適当にかいておく。

これで呼び出されようが知るか。

こんなことできるのはいまくらいだろうし。

平和（前書き）

さすが初心者

しょーもないっす

## 平和

「くそ、まさかあそこまで長いとは」

赤く染まる夕日を眺めながら、家への帰路を辿り、愚痴をこぼす。将来の進路にはいろつとがそこまで悪いことなのか？

いや平仮名だったのがいけないのかもな。

自分の進路の希望を決める用紙にふざけてばいろつとと書いた俺はこうして日がくれるまで担任教師の内田に説教をくらわされた。

まあ…書き直せと言われて社長とかいた俺にも非はあるだろうが。

説教の内容を切れ切れに思い出していると、いつの間にか家の前までできていた。

「ただいま」

おかえりすらもなしですか、家の家族は。

適当に辺りを見渡すと一人分の靴しか見当たらなかった。家族は買物か。

そして、また来てんのかあの人…

軽いため息をついて居間へと向かう。

「家人ゼロでもおかまいなしですかあなたは」

そこには、コタツに首まで潜り込んでコタツから両手だけ出し格闘ゲームをプレイ、たまに一時停止させ、傍にあるポテトチップスに手を伸ばす。というローテーションを繰り返しているボサボサのセミロングのおば…お姉さんがいた。

「んっ？」

俺に気づいた彼女は首だけをこっちに向ける。

人の家に勝手に上がって、TVも勝手につけ、ゲームを勝手にプレイし、しまいにやお菓子も勝手に拝借とは、この人日に日に行動が酷くなつてないか。

「また一日中ゲームですか…」

「そっ！でもそろそろ飽きたからメイちゃんにかしてあげる！」



「メイじゃなくてナルですって」

この人は、至道奈央さん、となりの家の長女でよく家に遊びに、というか家に寄生している。

もう二十四歳でいい年なのに、仕事もなければ彼氏もない。

最近は寄生頻度が上がってきているのだが、なにか嫌なことでもあったのだろうか。

ちなみに、不法侵入、家計圧迫などの問題は家の親が全て容認している。

おおらか過ぎんだろ、両親！

後、まじめに鳴って言う字でメイはやめてほしい。この人、どこでもかんでもメイって大声で呼ぶから

はずかしいんだよ。俺はト○口なんか見たことないから。

「どつちでもいいじゃん、さあ対戦だ！」

そういつて、たつた今まで使っていたコントローラーを俺に無理やり握らせる。うわっ、ぬめってる。

俺コントローラーに油かけた覚えはないんだけど、随分とオイリーになって……

奈央さんがもうひとつのコントローラーを接続した瞬間、インターホンがなる。

「ごめんください」

声の主はわざわざ玄関までいく必要もなく断言できる。

奈央さんの母親だ。

いつも、だいたいこの時間に家に来るのだ。理由は勿論、

「ほら、お迎えが……」

あれ、いない？確かに二秒前までコタツに潜っていたはずだが。

いつもはトドの癖になんて俊敏さだ。

仕方ないので、玄関のほうへ声を上げる。

「おばさんすいません、逃走しました」

「誰がおばさんだ……！」

いたっ！奈央さんに殴られた、いやあなたのお母さんに対してだっ

たんですけど。つかどこにいた。

「もしかしたらお姉さんの聞き間違いかもしれないからもう一度言ってみて」

言いつつ、ぽきぽきと指を鳴らす。怖すぎるから！

「ほらもうー…いだっ！」

奈央さんの後頭部に拳骨が叩き込まれる。

「なにしてんのー！」

一撃が響いたらしく奈央さんはそのばに崩れ落ちる。

拳骨の主であるおばさんは奈央さんの襟首を掴んで玄関へとひきずっていく。

「ごめんなさいねえー、おじゃましましたー」

そういつて、出て行く。

なんというか…何度みても痛そうだ。

「ふう…」

さーて、片付けか…これの…。

外はもう真っ暗だ。

さっさと片付けないと俺が怒られる。

こうして平和な一日が過ぎていく。…つか、掃除当番おかしくね。何で俺？



平和（後書き）

ヒロインでねえー  
ー  
W  
W  
W  
駄文過ぎる

家族（前書き）

なんだろうこれ…

## 家族

「これで、最後！」

部屋を占拠していたゴミの最後の一つ

空き缶

をゴミ箱へとシュートする。

綺麗な放物線を描きながら、カシャンと小気味のよい音を立てゴールする。

やっと終わった。時間は…八時か、掃除開始が確か七時ほどだから、約一時間か。

日に日に淀みなく動けるようになる自分がいやだ……

今日は両親共々出かけてるみたいだし、適当にカップラーメンでいいかな。

「お兄ちゃん！美弥はビーフストロガノフがたべたいなあ〜」  
後ろからいきなり声を掛けられる。

そこには、ツインテールをフリフリと揺らしながら可愛らしく注文を告げる、少女がいた。

この娘は櫻井美弥ちゃん、とっても可愛い俺の妹だ。

まだ、あどけないが人形のように精緻で見る者全てを魅了してやまない（断言！）美貌の持ち主。もはや美姫といっても差し支えない。胸も平た…ゲホツゲホツ！

とまあ、こんな、可愛い、いや超可愛い妹の願いを誰が断れようか。カップラーメンなんて却下だ却下。今日はビーフストロガノフ、決定。

俺は本棚にたててある一冊の料理本をとりだしビーフストロガノフのページを開く。

「ちよつと待っていてくれ、すぐ作るからな」  
え〜とまず牛肉を細切りにして…

鍋の前で40分ほど格闘した結果、ついに俺渾身のビーフストロガノフができた。

さあ早く我が麗しの妹の元へともっていかなければ。

「出来たよ美弥ちゃん！」

「遅せえよグズ、そしてクス」

ちっ、こいつかよ。

「お前は今すぐ消えろ、そして美弥ちゃんを出せ」

こいつは美羽。俺の妹、とは思いたくないが、仕方ない、俺の妹、てか忌もつと。

悔しいが、美弥ちゃんと美羽は同一人物。

美弥ちゃん一人ならどんなによかったことか。

「きめえんだよ！」

うわっ！美羽に小説投げられた！！ロウキューブ最新刊が！！

「うるせえ！ビーフストロガノフ食うなら美弥ちゃんて食え！」

ちなみに、別に二重人格ではない。言ってしまうえば美羽が演技しているだけだ。

わかってる、わかっているのだが俺には抗えない。まあ、仕方ないね。

美羽も俺が美弥ちゃんに弱いことを知っているので何か俺に頼みごとをするときは必ず美弥ちゃんて話しかけてくる。

利用されていることはわかっている、わかっているのだが俺には抗えない。まあ仕方ないね。

「まずっ」

すると突然美羽は俺渾身のビーフストロガノフを流し台に流す。

「ばっ！お前いきなり何して…」

「ごめんねお兄ちゃん！」

はいはい、どんだんながしてね〜

「きも」

くっそ、体が勝手に…わかっている、わかっているのだが俺には抗えない。まあ仕方ないね、男だもん。

「カップラーメンのほうが数百倍うまいわ」

美羽は俺の買ってきた、ラーメンをピンポイントに狙って選ぶ。

「あつ、それ俺の……」  
無視してお湯を注ぐ。



## 夢想（前書き）

えー今までキャラの外見の描写をまったくしていないことに気が付き、最近少しずつ追加しています。

まあ多分下手で意味わからないと思いますけどwww

## 夢想

「俺のカップラーメン返せよ」

人の非常食を無断で、堂々と本人の前で食べるこいつにはやはり少しきつくガツンと、言わないといけならしい。

「ごめんね、美弥食べたいの」

俺の怒りは、二秒で塵と化す。

まあ、仕方ない。食べられてしまったのだから。

確かまだもう一個はあつた筈。

塩ラーメンはあまり好きじゃないのだが。

ないよりはましかと、蒸気沸き立つポットへと手を掛け、真ん中を勢いよく押し込む。

ガポッ！

.....

もう一度力強く押す。

スコッ！

先よりも軽い、空気の抜ける音。

これは、もしかしなくても。

「.....計画通り」

後ろからボソツと聞こえる。

なん...だと...奴はこれを全て計算していたと...?

「どうしたのよ、びびった眼して」

いまの小言は聞こえなかったかと思っっているらしく、なにごともないかのように、振舞う美羽。

だが、ニヤニヤは隠しきれておらず度々俺に背を向けクスクスとした笑い声が耳に届く。

「意味わからんスキルを習得しやがって...」

「なんのことやら...ぶぶっ」

くそっ。

しかしこうなってくると食べるものがないな。

…寝るか。

このまま美羽に過ぎたことを責めてもこいつは絶対に反省しないだろう。となれば、ただ俺だけが体力を無駄に消費するだけだ。

午後十時。寝るにはかなり早い今日は色々とあつて体力的にも精神的にも磨耗している。

布団に潜れば、瞬間に眠りに落ちることができだろう。

「じゃあ俺は寝るよ、お前も遅くまで起きているなよ」

「えっ」

「んっ？」

「いや…なんでも…お休み」

俺は後ろ手だけ上げ、寝室へと向かう。

布団は母親が今日干してくれたらしくフカフカで思ったより早く寝れそうだ。

明日はいい日であることを願おう。

.....

「鳴君、私ね、転校するの」

えっ、急にどうしたの？

「私、体弱いから、向こうで療養しなきゃならないの」

そんな、僕いやだよ！

「私もいやだけど、仕方なくて」

..... わかった。僕ずっとまってる。この町で真生ちゃんのことずっと待ってるから！

「鳴君、ありがと。私も絶対帰ってくるから」

約束だよ。

「うん、約束」

.....



夢想（後書き）

なんだこれ？

話が自分でも読めない

ちなみに真生はまおとよみます

## 予兆（前書き）

初心者＋元がしょぼいので意味わからない物語が続くと思いますww  
良かったらアドバイスなんかしてください

## 予兆

カーテンの隙間から陽光がこぼれる。

その光がちよと俺の顔に直撃し、眩しさで目が覚める。

もう朝か、早くに寝た筈なのに思ったよりもつかれていたらしい。

軽く時計を、見やるとそこには紛うことなく八時二十分をさしていた。

確か、学校の着席時間は三十分だったか、家から学校までは全力でも少なくとも二十分はかかる。

つまり…遅刻確定。

…たまにはサボってもいいだろう。

俺は潔く、二度寝を決め込め、布団をかぶる。

……………うーむ、寝れん。

まあさすがに寝すぎか。

あきらめて下に下りることにする。

ポーンとした頭に残る微妙な眠気を強く頭を振って振り払う。

『絶対帰ってくるから』

……………？

…何だ今の

どこかで聞いた声、聞いた台詞。

幻聴とは思えないほど明確に鮮明。

後ろを振り向く、しかしそこには壁しか映らない。

「…誰なんだ」

「お前が誰だよ！」

いつっ！妹が兄の頭足蹴にするかフツ！

「なんでお前がまだ家にいるんだよ！」

すると実羽は口に入れていた体温計をズイツと俺に見せる。

「38.4分」

「風邪だよ！」

風邪って、なんでこんな時期に

「うるさいな、湯冷めしちゃったんだよ」

風呂に入ったらすぐ寝るよ。

「考え事してたんだよ」

悩みなさそうな顔してるくせにな。

「お前と一緒にすんな！」

いちいち蹴んな!

「…で、お前はなんで家にいるんだよ」

寝坊したからサボるんだよ。

「怒られにいけカス」

なんて恐ろしいことを…お前は内田の恐ろしさを知らないからそう  
いえるんだ。あいつが本気をだせば半日、いや一日中だって説教で  
きると噂が流れるほどなんだぞ。

「きもい」

またバツサリと斬りやがる。

そのとき、家の電話が鳴る。

「内田かな」

軽くため息をつき、受話器をとる。

『ああ、櫻井か、今日は欠席か』

「ああ、すいません今日は少し風邪ぎみで…」

「おにいちゃん！早く学校にいかないよ」

ちよつ馬鹿!

『んっ妹さんか?、今学校にいくつて…』

「いや、違うんですよ、妹が風邪が酷くて、親今日はいないんで俺  
が看病しなきゃいけなくて、でも妹は学校にいきたくないっていうんで  
すよ、それで今日はいけませんすいません!」

相手方はびっくりしたのであろう、思いつき受話器をたたきつける。

ふうー。

「ちっ」

ちっ、じゃねーよ、かなり危なかったぜ。



「いけよ、不良」

「さぼりくらいで不良にされてたまるか！」

その後数十分にわたって激しい舌戦が繰り広げられた。

そのころには俺の中に現れた謎の言葉は完璧に霧散していた。

風説（前書き）

こころへんでキャラの名前でも

櫻井鳴

至道奈央

左闇光

林道秋

真生

です

## 風説

『…絶対帰ってくるから』

「っ！」

まただ、あの夢。よく覚えてはいないが間違いない。時計の長針と短針は6時50分をさしている。起きるにはすこし早い。

昨日のように寝坊するよりはましたが。

「絶対帰ってくるから……か」

何か意味があるのか、俺の深層意識は何を考えているんだ。

いくら頭を回転させても答えは毛ほどもうかばない。考えながら着替えていると、いつの間にか寝間着は制服になっていた。

さて、朝飯は、母さんと父さんはまだ寝てるだろうし、美羽…は起きてるかもしれんが罵倒されて終わるだろう。

仕方ない、パンでも探そう。

ネクタイが乱れていることに気づき、直しながら階段を下りる。

「あんた最近無駄に起きるの早いわね」

階段を下りてすぐ横の開放されたスライド式のドアの先に広がる台所では、美羽が中学の制服に着替え、焼き魚、味噌汁、白ご飯、煮物、という古典的な日本伝統の朝食をとっていた。

美羽は昔から和食が好きで、今では和食ならたいいは作れる程だ。

まあ洋食は目も当てられない出来だが。

俺はちらりとガラス窓の戸棚を見やる。そこにはパンはなかった。確かあそこ以外パンを置くような場所はない。

つまり、パンはないということだ。

こうなったら美羽に魚を半分程くれるよう頼むしかないか。俺はあまり和食は好きではない。更に美羽のことだ、どんなひどい罵声が飛ぶかはわからない。

しかし背にはらはかえられない。

「なあ、美羽……」

「死んでもやらん！」

一閃

カツコ良く決めんなよ。

時計はもはや7時四十分を示していた。いつも五十分には家をでる俺からしたら、そろそろやばい。

朝食は諦め、顔を洗い、歯を磨き、家をでる。

外は4月とは思えない冷気に包まれていた。

制服のポケットに手を突っ込み、肩をすぼめながら歩く。

学校まで約100メートルという所で声をかけられる。

「いよつす！今日は寒いな」

明るく左闇とは対象的なこいつは林道秋。

左闇と親友で左闇の紹介でこいつとは友達になった。

性格上正反対の二人が何故親友にまでなったかという秋もこわいものが好きで、趣味が近しかったかららしい。

「そいや、お前聞いたか、最近巷で噂の魔王の話」

「魔王？」

いつもなら妄想乙、と一蹴してやるところだがその噂は登校中他の生徒がしていたのを少し小耳に挟んで軽く気になっていた。

「そう、魔王。近頃街の不良が根こそぎ潰されてんだ。」

いいことなんじゃないか？

しかし秋は苦い顔をして首を振る。

「不良だけならな、だがその魔王の殲滅対象は夜間、11時以降で  
あるいてる学生なんだ」  
なんという、風紀委員。

「だが、こちらへの学校の風紀委員は見回りなんてするほど積極  
的じゃない、」

となると、個人またはなんらかの集団か。

「ああ、だが個人なんじゃないかというのがもっぱらだ」

個人？不良共を占めるのに？

俺と秋は下駄箱で下足に履き替える。

「しかも、なんとその魔王は女の子らしい」

女の子？まさか、まあもし女の子でもレスラーみたいな巨体だろ  
うな。

「はは、だろうな」

秋も笑う。

そうこうしているうちに、もう教室の前だ。

俺は一組で秋は二組のためここでお別れだ。

「またあとでな」

俺も頷き、教室の扉  
を開く。

登校してきた生徒で埋まっている教室の中でやっと慣れた自分の座  
席へと向かう。

今日も何も変わらない、少し不思議な噂を聞いたが、それはきつと  
大した問題じゃない。

となれば、いつも通り日常が始まるのだろう。

## 風説（後書き）

改行あんまりせず、しかも行間狭くてすいません  
これから練習してくんで

恐怖（前書き）

程、の便利さは異常

## 恐怖

俺が着席して5分程で担任の内田が教室に入ってきた。

そして、教壇に登るやいなや、無駄に通る明るい声で、俺達に告げる。

「なんと、いきなりだが、といつても前々から決まっていたことで、みんなには内緒にしていただけなんだが、今日からこのクラスに転校生が転入してくる。」

当然ながら、俺含め、クラス一帯が『はあ？』に包まれる。しばしの自失を乗り越え、クラスのお調子者が重要な質問を投げかける。

「その人は女の子ですか？」

「そうだ」

男子がざわめく。

その子可愛いかな？と期待に胸を膨らませる奴。

もしその子が俺に一目惚れしたら…なんで自意識過剰な妄想にふけるものもいる。

女子は女子で、仲良くなれるかな？とまだみぬ転校生を想う。

俺はというと、正直言って、内心は結構ざわついていた。

「はい、静かに、じゃあ入って来てくれ」

シーンと聞こえそうなほどに静まった教室にガラガラ、というドアが地面を擦る音が響く。

「よろしく」

教室、いや世界が止まった。

現れた転校生が、超のつくほどの絶世の美少女だったから……では  
ない。

逆に間違っても美、をつけることは憚られる容姿だから……でもない。



いや、このさいそれでも良かった。むしろそれが良かった。今の状況に比べたら、十段階評価でも、9を与えられる。

さて、そんな今の状況は、一言でいうと、『内田はいらぬ子』。まず、性別が違った。女の子？いくら生まれ変わっても無理だろ、という容貌。パンチパーマ。ジャストフィットサングラス。

スーツを着せたらあら不思議。二十歳にも達してないのに、ヤーさんの出来上がり。

「荒川瑠衣」

名前だけを端的に述べる。

「あゝ瑠衣って名前だから、女の子だと思っていたが、男の子だったとは」

黙れ。あとこの人に子はやめろ、どうみたら子をつけられる。お前の脳うじ湧いてんじゃね。

「えゝみんなじゃあ仲良くしてくれ、それではHRを終える

ああ、あと瑠衣君、君の席は空いてるところね」

事の重大さに気づかない馬鹿は明るく退場していく。

つか、仲良くとかねーから！どう頑張っても無理だつもの！！友達、なんて対等の関係築けるか！！築けるのは、主従関係か敵対関係（多分、なつたら人生終わる）だけだろ！

心のなかでとはいえ ツツコミに疲れ息が切れる。

ハッ！そういえばあの馬鹿は空いてる席、といった。ならば ちらりと一瞥した隣は、無人の机が聳えたっていた。

漫画とかなら、ここは可愛い女の子が座り笑顔で、「よろしくね」ドキッ、だろう。

それが、これだよ！ 隣にヤーさんがきとドキッ、なんかできるか！確実にビクッ、だよ！。

横からギギ、という椅子引きずり音が耳に届く。

やばいこわいやばいこわいやばいこわいやばいこわいやばいこわい。

いや、まてさつきはパット見だけで顔を注視はしていない。  
案外なんてことも…なかつた〜！？

ですよ〜

知ってましたよ、無駄だって、でも少しでもなにか寄すががないと  
精神保てないんで。

うわぁ、生暖かい頑張れ、視線があちこちからむけられてるう。

恐怖におののいていると一限目開始のチャイムが奏でられる。

世界史の初老の教師が入ってくる。

生まれて初めて授業に真剣に取り組みたいと思ったよ。

「そういえば転校生君はまだ教科書もつてなかったね。では櫻井君、  
見せてあげて下さい。」

なん…だと…！

教科書を献上しろというのか。

…くっ、仕方ない。「どうぞ」

あっ、目があった。

あれ、生きてるや僕。

ヤーさん君近いよ、いやまじで。

俺が求めていた変革はこうして行われた。

いつも通りの日常カムバックー！！

出会（前書き）

遅れてすみません  
最近忙しくて…

## 出会

変革というものの一つがヤンキー君の転校だとすると2つめは、俺の席の横に彼が来たことなのだろうか。

そして、3つめ、それは多分、今この状況を言うのだろうか。時は放課後。

場所は体育館裏。

人は俺を合わせて、4人。

三人は俺の目の前に並んでたっている。

俺は、壁を背にしている。

三人は、どう見ても、不良というものにカテゴライズされる容貌で真ん中の一人は忘れることなどできない、ヤンキー君だった言わずもがな、俺はカツアゲされかけていた。

「有り金」左の太った不良

「全部」右の金髪の不良

「よこせ」ヤンキー君

まあ、息ぴったり。って、ふざけてる場合じゃない。なんとかかこの場を丸く収めるにはどうしたら…

「早くしろ」

仕方ない、俺はポケットに手を突っ込む。しかし財布はみあたらない

あれ？急いで反対のポケットにも手を突っ込む。しかし財布はみあたらない。

体中をまさぐるがない。

「あの〜財布ないんで、すいません」

もちろんないからといって易々帰してくれるわけではない。

「ふざけんな！」

ブチ切れて殴りかかってくる。

もうだめだ。

眼を強く瞑る

そのまま一秒。二秒。まだ拳は当たらない。  
恐る恐る眼をあける

そこには、地面に倒れて呻いている不良たち。

そして、長く、風に流れる優美な黒髪を有する少女が目にはいった。

再会（前書き）

やっと、出た  
疲れた

## 再会

なんだろう、俺は何故日常から一瞬で非日常へと足を踏み入れる、ラノベの主人公のようになってるのだろう。

俺は、どんな異能を使えるんだろう、楽しみだ。

……じゃねえーよ！

マジかよ、こんな大男三人を彼女が倒したってのか。

しかも、三秒に満たない時間で。

「あ、ありがとう……」

しかし、なんであるうと、助けられたことには変わりはない。

礼はいつておこう。

「構わない」

そういつて、少女はこちらへ振り向く。

艶やかな黒髪が靡く。

美、というべきなのか、麗、というべきなのか。

天が二物も三物も与えまくった結果がこれだよ！

初めて人に見惚れた。

「っ！……！！！」

瞬間。世界が反転した。…弱いな、世界が回転…違うな、世界が洗濯機の中に……何をいつてるんだ俺は、とにかく、俺は一瞬で壁へと背中を打ち付けて、更に頬までもが痛いという状況に陥っていた。不良は彼女が倒してくれたはずなのに。

ああ、さっきの女の子は俺の夢だったのか。

さっき殴られるってときに実は誰も助けなくてなくて、俺は普通に殴られた、と。

ずきずきする頬と背中をさすりながらうつすらと目を開ける。

そこには、さっきの女の子がいた。

後ろにはいまや完全に気絶している不良たちが。

夢じゃないことはわかった。しかし、痛い。

その理由も一目瞭然。俺は彼女に蹴られたのだ。突き出している足を見ればわかる。

ちなみに黒…ゲフンゲフン！

しかし彼女はそんなことは気にも留めずに恐ろしい形相をつくる。

「ひっ！」

もはやこの人はさつきまでの女の子ではない、鬼がいた。

いや、俺は確信した。

これが、朝に秋が言っていた魔王だと。

オーラがどす黒く観える気がする。

「……ないのよ」

「えっ？」

「なんで迎えにこないのよおー！ー！ー！！」

叫ぶと同時にもう一度、蹴りを見舞う。

何とかみつともなく這いずって、それをよける。

「ちょ！ちよつと待ってくれ！迎えてなんだよ、俺たちは今日初めてあつたる！」

俺の言葉のどこが気に障ったのか、彼女を覆うオーラが一層濃くなる…きがした。

「お前はあー」

足を振りかぶる。

「最低のおー」

俺をまるでサッカーのボールとしか見ていないかのように。

「男だあー！ー！ー！！」

実際そうとしか思っていないのだろう。躊躇いなく、淀みもない、単調な、だがシンプル故に極めればとてつもない破壊力を誇る蹴りを放つ。

思考が澄み渡る。

全てがスローに映る。蹴りさえも。

ゆっくりと迫る光から逃れるため全力で左へ跳ぶ。

そのとき全てが現実に戻る。



眼前でコンクリートの一部にヒビが入り、そこから侵食するように  
周りから崩れていき、  
ものの数秒でコンクリートの壁は崩壊した。  
よく避けれたな、これ。  
死を目前にした人間の強さに感嘆する。

「……………」  
なにもいえない。

「ちっはずしたか」

「なっ！こんな直撃したら死ぬだろうが！ふざけんな！びっくり  
しすぎてアドレナリンドバドバっすわ！」

「殺すきだったから」

「おいおい、さらっと何言って。」

「とりあえず、落ち着け、一体君は何者なんだ」

俺の真面目な一言に彼女は一瞬、憂いの表情をつくり、すぐに答える。

「至道真生」

……………  
「真生って…なんでここに、小学のときに療養するって引っ越した  
はず」

ありえない、彼女がああ、病弱で人見知り、叫ぶなんてもってのほか、  
運動は勿論駄目、そんな真生が。

「直ったから戻ってきた」

このとき、最近夢に見ていた約束を思い出す。  
あれは真生だったのだ。

「いや、よかったじゃないか戻ってこれたんだろ、この町に」

昔の親友でもう一度出会えて俺もうれしくないわけがない。  
だが、真生は頬を膨らませている。

「どうしたんだ？戻ってこれたし、俺も約束は破らさずずっとこの町  
にいた。それなのに何を怒って」

「迎えにこなかった」

はあ。

「いやでも、あのときの約束は待ってるっつって内容で言いながら、しっかりと約束の内容を思い出す。」

うん、間違ってるない。

「そうはいつでも、普通は迎えにくるでしょ！離れ離れになった王子と姫、そして囚われの姫を自分の身も顧みず救おうとする王子、そして、ついに姫のもとへたどり着く王子、しかしその瞬間王子は敵の魔弾に倒れてしまうの、そして駆け寄る私、王子を抱きかかえ言うの、好きですって……」

ほわぁーんと夢の世界へと旅立ってやがる。

つか、王子、死ぬのかよ。あと途中で姫が私になってるぞ。最後に敵って誰だ、医者か？医者が自分の患者連れ去られそうだからって撃つかよ。

はあ、こいつ、実はこんなメルヘンちゃんだったんだな。

「でも、こなかった」

うっ急に寒気が……

「なんでこなかったのよぉー！ー！ー！」

王子じゃないからでーす！！

もうこれ、女心は複雑、とかってレベルじゃねーだろ！

もうやだ、泣きたい。

突然の再会、今になって気付いた幼馴染の趣味。

なんかもう波乱の予感しかしなかった。

## 危惧（前書き）

サブタイトルは二文字にするという変な括りをつくってしまったために

こんな、物語と物語のつながりの回のサブタイトルに異常に悩みます。

早くもネタ切れ

自分の語彙の貧困さに泣ける

## 危惧

……相変わらずだなこの人も……  
家に着いたとたんこれだよ。

一人の女性を中心にゴミ、漫画、お菓子、ゲーム。

「奈央さん…折角真生が帰ってきたんだから今日ぐらいは家にいたほうが」

「ああ、多分今頃あいつは母さんと買い物にいつてる筈だから、今家にいてもあいつに会わないのよ」

だからつて人ん家を荒らしている理由にはならないでしょう。

「ただいまー」

そんなときに、妹の美羽が帰ってくる、随分と早いお帰りだ。

「あつ奈央さんこんにちはー」

「こんちゃー」

あまり興味なさそうに挨拶する。すでに彼女の目には今戦闘しているボスしか目に入っていない。

「あつ、そこでそれはずるいつて！つていつの間にか回復アイテム尽きてる！」

どうやら決戦前の準備を忘れていたらしい。

「奈央さん！それならあたらなければいいんだよ」  
さらつと無謀なアドバイスだなおい。

「そつか！よーしガンバロっ！」

やる気になんのかよ！

「あつ、死んだ」

そりゃな。

「メイちゃんやってー」

諦めたよ！

無理やりコントローラーを渡され、無理やりボス再戦。

てか、普通は町に戻って装備整えるだろ。

まあ、始まってしまったので、やってみようか。

それからの戦いはなかなか白熱した。

相手の攻撃を避け反撃、しかし俺の攻撃も避けられる。

そして俺が回避、反撃、相手が避け、反撃。

この繰り返しである。

しかし、相手はコンピューター、俺は人間。

長時間の戦闘による精神的に出来た疲れが一瞬の判断を鈍らせ、操作を誤る。

そこに、ボスの必殺技が叩きこまれる。

HPがごっそり削られ…ゼロになる。

いい勝負をしていただけに、悔しさも大きかった。

「くそ！もってかれた！」

「左足が？」

ちげえーよ！ゲームでんなもんもってかれてたまるか！

「なら、右手？」

弟助けた覚えすらないよ！

「ってことは…体のどこを」

どこも持ってかれてないよ！どんだけ俺に真理見せたいの！？

「全身もってかれるよ」

ボソツと怖い一言が後ろから呟かれたんですけど！ア○フォンス君に謝れ！

「ん？あ！もうこんな時間だ、私もう帰るね」

「あ、ああはい」

「またきてくださいねー」

そういつて、何の片づけもせず帰路へつく奈央さん。

…せめて、掃除してって…

奈央さんがかえって数分後、家中にインターホンの音が響く。

なにか忘れ物でもしたんだろうかと考えて、すぐ違うかと結論をだ

す。

なぜなら、奈央さんは自分の家からなにかをもってくることなどないからだ。全てうちにあるものを使う。

ならば誰かと思いつつ、扉を開く。

「ひさしぶりねえ鳴君」

ばあちゃんがいた。

帰ってくるなんて一言もいわれてない筈だが。

「あら、キョトンとして、あたしが来ること知らなかったの？」

「はい、まったく」

「おかしいわねえ夕菜さんに電話しといたんだけど」

「ああ…最近は何早く寝たりしてあんまり親とあってないんで、教えてもらってないだけだとも思います」

俺の言葉を聞くと、ばあちゃんは少し憤慨したように。

「まあ！それでも自分の子供にそれくらいは伝えておくべきでしょう！まったく、これだからいつもふらふらしてる人は！」

この人、実の息子である父さんと、父さん似である俺のことを溺愛しているのだが、嫁いできた母さんと母さん父さんにあまり似てない美羽のことをあまりよく思っておらず、ことあるごとに嫌味を言う。

ちなみに、ふらふらというのは母さんの趣味は旅行なのでよくふらふらと出て行くからと、ばあちゃんはこういう。

しかし、母さんは勿論、美羽も嫌いな妹とはいえ一応家族、悪く言われるのはいい気はしない。

だから、溺愛されていても俺もこの人は苦手だ。

だからといって、追い出すことなんかできるわけもないので。

「ああ、どうぞ」

言って、下がる。

「ええ、お邪魔するわ」

ばあちゃんが玄関へと足を踏み入れた瞬間、ふと思い出す。

部屋、ぐっちゃぐちゃだ………

もうとめることは出来ないのはわかってるし、たとえとめても数分が限界だ。

そんな時間であれを綺麗にするなど到底不可能だ。

俺の中に一つの可能性が危惧されるべきものとして飛来した。

## 危惧（後書き）

内容の軽さのわりにサブタイトルが重いという、タイトル詐欺もい  
いところですねこれwwww



美弥（前書き）

はいっ！

11話です

気付けばもう二ヶ月……

もうむしろすがすがしいっす

## 美弥

「あら」

「ばあちゃんは居間に足を踏み入れようとして、やめた。」

「なんて汚さ…よく住んでいられるわね」

「いつもはこうじゃないんだけど…いや奈央さんは毎日のように来てるから、いつもこうか。」

「掃除もしないなんて、本当に女として最低ね」

その言葉は、母さんに向けたものか、それとも居間で寝転がって、硬直している美羽に対するものか。

多分両方だろう、ばあちゃんは俺の方を向くと

「キッチンと清掃してある清潔な部屋はあるかしら？」

キッチンと清掃と清潔を強調して聞いてくる。

「母さんと父さんの部屋はあんまり使っていないから綺麗だと思いますけど」

「なら、彰の部屋を借りるわ」

即答で、早足で父さんの部屋がある、二階へと上がっていく。美羽など初めからいないかのように一瞥もせず。

俺がしばし呆然と、階段の向こうを眺めていると、居間からカランという空き缶同士が触れることでおきる音がした。

居間をのぞくと、そこでは美羽が丁寧に、床に散らばっている空き缶、スナック菓子の空き袋、ちり紙、何一つ残さないように拾っているのが見えた。

「……………」

初めてみた。美羽が掃除、なんて面倒くさい作業を自分から進んでしているところなんて、しかも完璧なまでに徹底して。

美羽は俺に向いて

「もう夜も遅いからお兄ちゃんは寝てもいいよ」

美弥ちゃんスマイル。

今ここには俺と美羽二人きりなのに、二階にはばあちゃんがいるが、別に大声でもない限り、聞こえることはない。

「…どうしたんだ、美羽」

「美羽？誰それ？私は美弥だよ」

「！？」

愕然とした。

俺はいままで何度もこの状態の美羽のことを美弥ちゃんと呼んでいたが、美羽自身が自分で美弥、と言ったことはなかった。ばあちゃんがいるからか？

俺は実際のところ二人の仲を詳しくは知らない。

基本的にはばあちゃんは俺が学校にいつている間に家に寄って俺が帰るころには美羽は部屋で、ばあちゃんも居間か父さんの部屋にいたので二人が直接顔を合わせたのを見るのは久しぶりだ。

ただ、母さんはよく言う、

「あんまりおばあちゃんとみーちゃん仲良くないから、出来る限りふれないであげてね」

と。

だから、ずっと二人は仲が悪いと思っていた。

だが、この場面をみて俺はなにか勘違いしている気がした。

仲が悪いというよりも、なんというか……

そんな俺の思考を断ち切るように美羽が言う。

「掃除おわったよ、お兄ちゃん、だから美弥寝るね！」

元気に言っつて自室へと歩いていく。

居間を覗くとそこは、綺麗、としか形容できない程に完璧だった。

テレビの上に置かれた時計をみればもう十二時を過ぎていた。

自然と欠伸がでてくる。

俺も寝るか。

美羽も部屋にいつちまったし、やることもない。

少し聞きたいことはあるが、急を要するほどでもないだろう。

明日の朝にでも聞くか。

そう考え、俺も自室へと向かう。

美弥（後書き）

暗いorz

暗すぎてもういやだ

久々の投稿が暗いとかねーよー

## 徒勞

頭の上でなり続けるアラームも俺の覚醒材料にはならなかった。それをアラームも察したのか結局は目覚ましとしてはあるまじき、聴覚ではなく痛覚へと訴えかけて俺を深い眠りから起こしてくださりやがった。

どういうことかというところ、俺の電話兼目覚ましである携帯電話が長時間のバイブによって俺の額へと落下してきたと、そういうわけだ。額をさすりながら携帯のフリップを開き、時計をみやる。

そこには

九時三十七分。

俺の目がおかしくなければ確かにそこにはそう描かれていた。あつ、三十八になった。

「……………っ!？」

たっぷり五秒ほどほうけてから慌てて起き上がる。

いやいや、もう遅刻とかいうレベルじゃねーぞこれ!

またサボるといふ手もあるが、前回内田のやつ、サボりつて気付いてたらしいしな(確実に妹のせい)、幸い説教は免れたが今日まで休めば、たとえ本当に事情があつてもあいつは信じないだろう。

仕方ない、遅刻だがいかないよりましだ。急いで、着替えを済ませ、自室から一直線最短ルートで玄関へと走る。

しかし、そこでここまでの遅刻なら急ぐ理由もないかと思ひ、走る、という動作を歩く、へと変更する。

戸を閉め、さあいくかという瞬間

「あつおはよ」

目の前に真生がいた。

ジャージ姿で長い黒髪は一本に結っていた。いかにもな運動スタイルだった。

みれば犬(カルテット(奈央さん命名))の散歩をしていたらしい。

「あ、おはよ、っってお前学校は!？」

すると真生はキョトンとして

「今日日曜だけど」

サラリと言う。

俺は急いで携帯を開き、日時を見る。

九時四十四分 (日) 四月十七日

と映し出されていた。

そういえば昨日は補習授業だったか、まったく土曜も授業なんて意味のわからんことはやめてほしいね。

「……………なんだよ、はあ」

安堵と疲れを混ぜたため息をつく。

「ああ、じゃあおやすみ、俺疲れたから寝るわ」

真生に一言いって、帰宅する

「うん、騎士様目指して頑張ってねー」

気だったのだがすぐさま反転し聞き返す。

「…なんだって？」

「だから、騎士様目指して頑張ってと」

あの設定まだ続いてたんだ、えーと、だけど昨日の話とちよつとちがう気が。

「鳴は私を迎えにこれなかったことを悔やんでくれていたんだね、それで今度は俺が一生真生を守るって、その言葉すっごい感動したよ」

目をキラキラキラさせながら、俺の記憶にない俺が言っただけの言葉を再現する。

「いってねーよ、俺がいつんなこといった!」

「夢で」

「なにそれこわい」

もうメルヘンじゃなくね、ただのやばい妄想ちゃんじゃね。この人てかそれ以前に、蹴りでコンクリ粉砕できる人を守る必要性を感じないので。むしろ守ってほしいんですけど。

はあ、さらに疲れた、最近ため息が癖になってきてる気がする、はあ。

「あっそうそう、今日は奈央さんに家にくるのは遠慮するよって言っていてくれないか、昨日からはあちゃんがきてさ」

「えっ、うんわかったー」

元気に返事する。

さて、でゆっくり寝るとするか。

布団の温もりに心を軽く浮つかせながら玄関をくぐる



徒勞（後書き）

題名ないよーー泣

くるしまぎれなのはわかってますすいません

## 魔王

俺が目覚めると、そこは光に包まれていた。

眩しい、としか思えない。

体は全体的に重くだるい。

何がおきたのかを理解するのに実に十秒を要した。

「昨日、真生とわかれてから、もう一度寝て、起きたら次の日の朝……か」

時間はまだ六時を過ぎたばかりで、俺の朝としてはちと早い。

だるいのは寝すぎだろう、頭がぼーっとしてくらくらと痛い。

俺はカーテンを閉め、制服を着る。

とりあえず顔を洗っておこうと思いい、階段を下りる、やばい視界がまだちよつとクラクラする。

おぼつかない足取りでなんとか、洗面所へと向かう。

洗面所への道のりの途中には居間があり、なんの気もなしに軽く覗き、驚愕する。

「八時十分……」

そうだった、俺の部屋の時計は壊れてたんだ。だから仕方なく携帯を使ってたってゆうのに、くそっとうりて美羽もばあちゃんもいないわけだ。

顔を洗わなくとも、十分過ぎるほどに目が覚めた俺は、非常食が入っている戸棚からカンパン（袋）を取り出し、急いで家を出る。

どんだけ、遅刻に定評があるんだ俺は……！

まだ、四月で少し肌寒い日であったというのに、机に突っ伏した俺の背中も水でもかぶったかのようにびしょびしょだった。うへえ、気持ち悪い。

横ではキチンした格好でサングラスから眼鏡へと装飾品を変更させ、カリカリと朝のまだHRが始まる前だというのに、勉強をしてらっしゃるヤーさんがいらっしやっした。

もしかしたら、復讐、だなんていつてまた体育館裏に呼び出されるかと結構ビクビクしていたのだが、その心配はなかったらしい、だって休みがあけたら一生懸命勉強に打ち込むガリ勉君になっていたんだから。

いやーよかつたよかつ……………はっ？

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやー！！  
なにが起きたんだよ！一昨日までは人よびだして、金せびろうとしてた方がなんで一日でこうも変わったんすか！？、もう別人クラスですよこれ。

俺はおそろおそろ、ヤーさん様改め、ガリ勉君へと会話をこころみる。

「あの、もしもし？」

ヤーさん様改めガリ勉君は

「はい、なんですか」

めっっちゃいい笑顔で返事してきやがった。

でもそれ、獲物を前にした獣にしか見えないっす。

「い、いや勉強教えてほしいなーなんて」

なにいつてんだ俺は。

「いいですよ、どこですか」

承諾されるとは、とりあえずどこか聞かないとな。

「あの、この二次方程式とか」

「わかりません」

光速でわかりませんキターー。

「いやいや、これ一年のころの部分だから」

「いや、僕の数学の知識は分数までです」

それは、数学ではありません、算数です。

まあ、いままで悪事しか働いてないといっても過言ではない、人がいきなり勉強始めてもわからないか。

ま、まあこれでこのヤーさん様改め、ガリ勉君は非常に温厚ということがわかった。

では本題へと。

「あ、あのなんでそんなに変わったの？」

その問いにヤーさん様改め、がり勉君は少し遠い目をする、早くて二日前のこのくせに。

「僕は改心したんですよ、あの女性に出会って」

「女性？」

「至道真生さんです」

あいつかい！

「彼女は不良少年を更正させるために日々闘っているんです」

「……………」

「しかし、世の中には彼女のその海よりも深い慈悲に触れていながらも更正できない馬鹿が山ほどいます」

海よりも深い妄想癖ならしってるけどな。そして、それ以降の話は別に聞いちやいなんだが。

「そんな馬鹿共によつて彼女は不本意にも魔王という異名をつけられてしまったのです」

へえー。カンパン結構うめえな、今度いろんなの買ってみよう。

「だがしかし！、私は彼女を魔王だとは思っていません。むしろ天使だと思っています」

ふーん。あつ、投げたカンパンを手を使わずに食ってたらミスった。俺はその落ちていくカンパンを救出しようとして手を伸ばす。

瞬間。

「ひい！」

びくつと顔を腕でガードしながら後ずさる。

「ど、どうしたんだ？」

カンパンが床に落ちたことも忘れ、聞く。

「い、いや、真生さん、いや天使様に更正を促されたさいに受けた慈悲の数発の蹴りが体に染み付いてしまっただけね。誰かが腕を振り上げただけでも、恐怖を感じるようになってしまったんですよ、いやはやお恥ずかしい」

魔王こえー！ー！ー！ー！トラウマ作っちゃったよ！あんな怖かった人を暴力で屈させた上に心にも最悪のダイレクトアタックを決めていったよ！！魔王って呼ばれても仕方ねーよ！

「あ、ああそあなんだ、ごめん」

「いえいえ、あつそろそろHRが始まりますね」

そういつて、ヤーさん様改め、がり勉君は背筋をピンと伸ばして前を向く。んっ？まだ足震えてるー！ー！！

ま、真生は？、どこだあいつ。

体育館裏であいつにあつたとき、この学校の制服を着てたから、転校してきてるはずだ。

だがこのクラスじゃないかも知れない。しかし思えば転校、という一大イベント（？）があれば生徒が黙っているはずがないのだが。

「はーい、静かにしろー」

無気力な声で内田が入ってくる。

「なんとびつくり今日も転校生だー、しかも今回は本当に女の子」となれば真生しかないだろう。このクラスだったのだが。

「しかし、残念なことに初日から遅刻だ、だからまだ来ていない」  
教室中でブーイングが起こる。

そのとき、廊下の辺りからタツタツと走る音が聞こえてくる。

「転校早々遅刻すみませーん！」

開いたままのドアから真生が突入してくる。

その顔には、正確には口元には、なにやら赤いものを付着させながら。

「おい、至道、その口元の赤いのはなんだ？」

「えっ？ああ！すいせん急いでて、ケチャップです」

真生は急いでポケットからハンカチをとりだしそのケチャップをふき取る。

しかし、俺にはケチャップには見えなかった。

ヤーさん様改め、がり勉君の話聞いたせいだろう、あれがどうしても血にしか見えない。

それは他のクラスメイトも同じらしくざわめいていた。

どうやら、魔王の転校という噂はかなり広まって、騒がれていたが、ヤーさん様改め、がり勉君の話に夢中で気付かなかつたらしい。

「じゃあ自己紹介よろしく」

「はい、えーと至道真生です。よろしくお願いします」

そのとき、確実にクラスが一つになった。

(至道魔王!?)

「自ら魔王を名乗りやがった」

「これは宣戦布告なのか!？」

「この学校はおしまいだ」

などと周りから聞こえてくる。

まあって名前を呼んでいる俺でさえ魔王と聞き間違えたほどだ。

名前を知らない皆が魔王と聞こえても仕方がない。

恐怖っていうのはとことん、人を混乱させるものらしい。

横ではヤーさん様改め、がり勉君が泡を吹いて失神していた。

絶対天使じゃねーよ。あいつ。

「では、至道の席は櫻井の左隣がいいな」

内田は大丈夫らしい。まあ、名前は名簿で見ているし、悪名も聞いていないからか。

真生が俺の隣に座る。

「よろしくー」

その笑顔が今の俺には狂気表情にしか見えなかった。

「え、ええよろしくお願いします」

ヤーさん様改め、がり勉君が転校してきた以上の恐怖が教室を包んだ。

「なんで、敬語？」

ただ一人、恐怖を生み出した本人は可愛らしく首をかしげていた。

## 優しさ(前書き)

よし、二文字縛りとか考えた奴は馬鹿(自分)だからこの縛りやめよう

## 優しさ

昼食時。

俺は残り僅かの乾パンをもって、光の席へと赴く。

「あれ？なんで僕のとこに来たの？」

「なっ！」

えっ、軽くシヨックなんだけど、友達だと思ってたのに。

結構マジに落ち込んだ俺を見て、光は軽く笑って

「いや、僕のとこに来てほしくないってわけじゃなくて、真生ちゃんのとこにいつてあげなくていいのかなって」

「？、なんで俺があいつのとこにいかなきゃいけないんだ」

意味がわからない。

チラリと真生の方を見れば。

一人ぼっちだった。

普通、転校生って最初の数日はもてはやされるものだと思っていたのだが。

「彼女可愛いしみんな興味はすごくあるみたいだね。魔王とやらの噂のせいで怖くてだれも近づかない、というか近づけないんだ」

「……………だからってなんで俺なんだ」

「幼馴染なんですよ」

言ったことはなかったはずだが。

「一時間目の時、先生が他のクラスより早いからって、授業を転校生への質問時間にしたじゃない。そのとき鳴は寝てたから知らないと思うけど、このクラスで格好いいと思う人はって質問があって、彼女即答で鳴って言ってね」

はっ！？あいつ俺が寝てる間になんてことを。

「そ、それで？」

光はおかしそうに、クスクスと笑う。最近気付いたがこいつはこうやって笑うのが癖らしい。



「クラスは騒然となつてね、理由はって聞かれて、昔から一緒にいて、守つてくれるからってさ」

……なんか非常に恥ずかしいんだが。

「そうか、でもそんなことしてたなら、あいつが別に凶暴な奴じゃない……ってのはあまり否定できないが、悪い奴じゃないってことはわかるだろ」

俺のもつともな疑問に光は少し困つたような表情をして

「それが…最後に最近の趣味はって質問があつてそれに『趣味とはちよつと違つかもだけど不良の人達を更正してくれた瞬間って気持ちいいよね』っていつて」

ヤーさん様改め、がり勉君以外にも被害者はいるのか。

「い、いや、でも、別にそれだけなら特に問題は、いや問題はあるんだけど、そのむしろいい人って映ると思うんだが」

光は苦笑い。

「いや、彼女がそう言った瞬間、後ろの方から盛大にガタツて音が聞こえてね、みんなが振り返つた先には、ブルブルと恐怖におびえた彼がいたんだよ」

彼、つてまさか。

「そう、彼だよ」

まさか、あの彼か!?

光は神妙な面持ちでうなづく。

「荒川瑠衣君」

……誰だ?

やべえクラスメイトの名前も忘れるとかさろそろやばいかもな俺。

「いや、君の隣にいるでしょ」

わるいが俺の横にはその噂の魔王様とヤーさん様改め、がり勉君しかないから、なにその綺麗な名前。

「そのヤーさん様改め、がり勉君の本名だよ」

!?!?!?

かつてない衝撃が俺を襲つた。

「初めてきたぞそれ！」

「最初先生言ってたから」

なんと、もう俺の中ではヤーさん様改め、がり勉君で確定だったのに。まあ言いやすいからこれで通そう。

「ん、でヤーさん様改め、がり勉君がビクツと震えて？」

「君の中ではもうそんな呼称なんだね荒川君がかわいそうだよ。えーとまあいいや、彼がビクツと震えて、そこにいるみんなは思い出したんだよ。彼は彼女が言う更正とは彼のような状態を言うのだとなるほど、つまり、あいつはやはり魔王なのだ、その名に恥じない感性の持ち主だと、そう認識したわけか。」

「そういうこと」

……… かわいそうな気がしないでもないが、それは全部自分で撒いた種だろう、仕方ないさ。

「…そうかい」

光としてはもう何も言う気はないようだった。

………

数秒考え、なるべくめんどくさそうに、席を立つ。

「仕方ねえな、あいつ弁当ないみたいだし、俺の乾パンでも分けてやるか」

そういつて真生の席へと一直線に歩く。後ろからフッフという暗い笑い声が届く。

なぜか泡を吹いて、気絶しているヤーさん様改め、がり勉君をスルーして真生へと乾パンの袋を投げてやる。

真生は上手くキャッチして首をかしげる。

「？」

「今乾パンの上手さについて、布教しててな。お前も食べ、そんではまれ」

真生は少し、ポカンとして、とろけるような笑みを零し乾パンを食し始める。

俺は隣の自分の席について、真生から反対に顔を向け、失神した気

持ち悪いヤーさん様改め、がり勉君を見て、結局うつ伏せる。  
はあ、さっさと今日終わんねーかな。  
なぜか顔が熱かった。

優しさ(後書き)

二文字縛りやめても題名決まらない

今後いいなと思うのあったら昔のも変えてきます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7940k/>

---

魔王な少女

2010年10月14日23時01分発行